

はじめに

アメリカ詩の父と呼ばれるウォルト・ホイットマン (Walt Whitman, 1819-92) は、一九世紀の半ばに、
「どの時代であれ、世界のすべての国家のうちで、最も詩的魅力にあふれているのは、おそらくアメリカ人だ。合州国そのものが、本質的に最も偉大な詩である」と詩集『草の葉』初版(一八五五年)の
「序文」で宣言した。また「ぼく自身の歌」"Song of Myself" (1891-92) の最後のセクションでは、次のように叫んでいる。

まだ未熟な鷹がヒューと降りてきて、ぼくが無駄口ばかりたたいていて、ろくに仕事もせずに
ブラブラしていると非難する。

きみ同様ぼくだって、これっぽっちも飼いや慣らされてなどいない、ぼくの言葉だって翻訳不可
能なもの

ぼくは世界の屋根に、この野蛮な狂喜の金切り声を響かせてやる。

ホイットマンが生きていた時代、国家としてアメリカはまだ発展途上にあつた。当時の人びとは、彼の詩を野蛮で礼節に欠けると感じていた。なぜならピューリタンによつて建国された国家では、神を称えるのではなく、「ぼくはぼく自身を祝福し、ぼく自身をうたう」(Whitman: Poetry and Prose 27)など論外であつたからだ。ましてや肉体やセックスを歌うことはタブーそのものであつた。一見してわかるように、彼の詩はアウトドア派である。好奇心にあふれた目で世界に挨拶する、樂觀的な詩人像が浮かんでくる。たとえば、初期の詩「ぼくにはアメリカが歌っているのが聞こえる」「I Hear America Singing」では、庶民の暮らしから聞こえてくるアメリカの歌に、ホイットマンは耳を澄ませている。

アメリカがうたっているのが、ぼくには聞こえる。さまざまな賛歌が聞こえてくる。
職人たちの歌が、一人ひとりが自分の歌を陽気に元気にうたっているのが

大工は厚板や梁の寸法をはかりながら、自分の歌をうたっている
石工は仕事の準備をするとき、あるいは仕事を終えるときに

船人は自分の船で自分の歌をうたっている 水夫は蒸気船の甲板で

靴職人は仕事台上に座つて 帽子屋は立つて

樵たちの歌が 朝に仕事に出かけるときの、あるいは昼休みの、日暮れ時の農夫の歌が

母親の、仕事をしている若い妻の、あるいは縫い物や洗濯をしてる娘の、うっとりする歌声が

聞こえてくる

男であれ女であれ、それぞれがほかのだれでもない自分の歌を

昼は昼の歌を——夜は、遅しくて気のいい若者たちが

大きな声で、自分たちの力強く、美しい歌をうたっているのが、ぼくには聞こえる

(Whitman 174)

この詩でホイットマンは、ヨーロッパやアジアの長い歴史を持つ国々とは違って、アメリカという国家が貴族階級のない文明国であることを示唆している。別の言い方をすれば、自由平等を前提とした労働者たちによる、民主主義の歌こそアメリカの歌だという主張だ。しかし、ホイットマンは彼の想い描いた「アメリカの歌」を、自分だけで描けるとは考えてはいなかった。彼は「未来の詩人たち」*「Poets to Come」*にその想いを託している。

未来の詩人たちよ

ぼくの後にやって来る詩人たちよ！ 雄弁家たちよ、歌い手たちよ、音楽家たちよ！

いまの時代は、ぼくの価値を認めないし、ぼくの求めに応えてはくれない

しかし、きみたち、この大陸に生まれ、元気に育つ、新しい子どもたちよ、これまで知られて
いた者より、さらに偉大な種族よ

目覚めたまえ！ ぼくを正しく評価できるのは、きみたちなのだ

ぼくは未来のために、暗示的な言葉をひとつかふたつ書くにすぎない

ぼくはほんの一瞬、前に進み出て、向きを変え、そそくさと暗闇にもどるだけ

ぼくはすっかり立ち止まることなく、放浪しながら、きみたちにさりげない眼差をむけ、それ
から顔をそむける

その眼差しの意味するところは、きみたちに任せて
肝心の仕事は、きみたちに期待している、それがぼくだ

(Whitman 175)

ホイットマンの時代の民衆は、諸手を挙げて彼を歓迎してくれたわけではない。それはこの作品か
ら読み取れるだろう。

文学史的にみれば、ホイットマンは民主主義の可能性を追い求めた「アメリカン・ルネサンス」を代表する詩人である。彼ほど「アメリカの歌」をうたうことに拘り続けた詩人はいないだろう。その作品は、歴史や伝統よりも、自分の肉体を含めた、手で触れることのできる場所（空間）を「こゝ、いま」の視点からとらえ、うたっている。ときに彼の言葉は、饒舌で同じ主張の繰り返しが多いという批判もあるだろう。そう感じたら、原文のリズムを声に出して確かめてみるといいかもしれない。彼の詩の根っこが「声」にあるのがわかるはずだ。

具体的な作品に入る前に、アメリカ詩の変遷を少しみておこう。アメリカが一七七六年に「独立宣言」で自らを「アメリカ緒邦連合」(The United States of America)と呼んだとき、アメリカはまだ一つの国家ではなかった。正式に国家となったのは、憲法が発効して、政府が発足した一七八九年以降のことだ（一七八九年はフランス革命の年であり、日本では江戸開府一八六年目にあたる寛永元年、喜多川歌麿や葛飾北斎が活躍していた時代にあたる）。一三の独立諸邦の連合体で、二重の国家性、すなわち連邦制をとって、各州は一定の範囲内で国家として機能することが認められていた。厳密な意味では、アメリカは「合衆国」ではなく「合州国」と表記したほうがよい。

アメリカ最初の詩人は、イギリス生まれのアン・ブラッドストリート (Anne Bradstreet, 1612-72) である。一八歳で新大陸にわたったピューリタンの女性による詩集『アメリカで生まれた一〇番目のニューズ』*The Tenth Muse Lately Sprung Up in America* (1650) は、本人の承諾もないままロンドンで出版されたという。それから三五〇年以上経つわけだが、一九世紀の半ばにホイットマンとエミリ・

デイキンソン (Emily Dickinson, 1830-86) が現れるまで、アメリカ詩の獨創性を示すような作品は書かれなかった、そう言っても過言ではないだろう。もちろん多くの詩人が作品を発表してきたが、その大半は、主題や形式においてもイギリス詩の影響から抜け出すようなものではなかった。一七世紀のブラッドストリートから二〇世紀はじめのエズラ・パウンドにいたるまで、「アメリカ詩とは何か」という問いは、新大陸の詩人にとって大きな意味をもっていた。それはイギリスをはじめとする旧大陸の詩的伝統から独立し、広大な大地の歌をどのように創造するかというアメリカ詩固有の問題と結びついていたからだ。パウンドの表現を借りれば、「伝統を変革する」(Make It New) のが最大の課題であった。この時期は、日本の伝統芸能を語るときにしばしば使われる「守・破・離」のプロセスに似ているかもしれない。

ここで、二〇世紀初頭から現在までのアメリカ詩の大まかな「地図」を作っておこう。

第一次世界大戦(一九一四〜一八)によって、多くのアメリカ人がヨーロッパの戦場へ出かけ、旧大陸と新大陸の文化的ギャップを経験することになる。そこから国際的な「モダニズム」と呼ばれる芸術運動が生まれるわけだが、その運動の渦巻きを中心にアメリカの詩人がいたことはあまり知られていない。

この戦争では、戦車、戦闘機、機関銃、毒ガスなどがはじめて使用され、戦闘員だけでなく、多くの詩人たちにもトラウマを残すことになる。詩人T・S・エリオットは、この戦争が引き起こした伝統的信仰や社会秩序の崩壊したヨーロッパの精神風土を、斬新なスタイルで表現した。それが『荒

地』*The Waste Land* (1922) である。この作品は、二〇世紀前半の英米詩にもっとも大きな影響を与えたモダニズムの作品として記憶されている。

この時期、ホイットマンが待望した詩人たちが登場する。たとえば、一九二〇年から二六年の間に出版された作品だけに限ってみても——パウンドの「ヒュー・セルウィン・モーバリー」“Hugh Selwyn Mauberly” (1920) ‘ウォレス・ステイヴンズの『ハーモニアム』*Harmonium* (1923) ‘ウィリアム・カロス・ウィリアムズの『春のいろいろ』*Spring and All* (1923) ‘ロバート・フロストの『ニューハンプシャー』*New Hampshire* (1923) ‘マリアン・ムーアの『観察』*Observations* (1924) ‘ラングストン・ヒューズ (Langston Hughes, 1902-67) の『物憂いブルース』*The Weary Blues* (1926) ‘H・D (ヒルダ・ドゥーリトル) の『全詩集』*Collected Poems* (1925) ‘E・E・カミングズの『チュエリツプと煙突』*Tulip and Chimney* (1923) ‘ハート・クレイン (Hart Crane, 1899-1932) の『白い建物』*White Buildings* (1926) ——などがある。

第二次世界大戦は、さらに大きな変化をアメリカ詩にもたらすことになる。戦後のアメリカ社会は、物質的繁栄を謳歌しながらも、一方では冷戦、朝鮮戦争、非米活動委員会による反共産主義 (マッカーシズム) の状況下にあつて、アメリカ的価値観を国内外に誇示するようになる。アメリカ詩について言えば、二〇世紀初頭の「イマジズム」(Imagism) から発展したモダニズムがこの時期に大きな転換期をむかえる。ひと言でいえば、T・S・エリオットに象徴される「ヨーロッパ的知性」から、ウィリアム・カロス・ウィリアムズに代表される「アメリカ的土着」へと、詩の振り子は動い

てゆく。

五〇年代になると新しい動きとして「ポエトリー・リーディング」が注目されるようになる。詩人による自作詩の朗読は、それまでの活字一辺倒の目で読むだけの詩に、肉声による「歌」という詩本来の姿を取り戻そうとした試みとして高く評価できる。そしてポエトリー・リーディングは、古くて新しい詩の流通手段として世界中へ広がってゆく。

こうした五〇年代の動向を的確に反映した詩集として、アレン・ギンズバークの『吠える、その他の詩』*Howl and Other Poems* (1956) と、ロバート・ロウエルの『人生研究』*Life Studies* (1959) がある。「狂気によって破壊された世代の最良の精神」に捧げられたエレジー「吠える」は、時代を超えて、いまま読み継がれているアメリカ詩のベストセラーとなった。一方、個人と社会の「病んだ季節」を大胆に描いた『人生研究』は、ロウエル自身の詩風の変化だけでなく、アメリカ詩の転換期を示している。編集者のドナルド・アレン (Donald M. Allen, 1912-2004) は、おもに一九二〇年代に生まれた詩人たちの作品を編纂し、アンソロジー『新しいアメリカ詩』*The New American Poetry: 1945-1960* (1960) を出版した。そして六〇年代以降のアメリカ詩の地図を描いた。「ブラック・マウンテン派」、「サンフランシスコ派」、「ビート派」、「ニューヨーク派」、そして「第五のグループ」に分けた。これらのグループに「告白派」と「ディープ・イマジズム派」を加えると六〇年代、七〇年代のアメリカ詩の動向が見えてくる。もちろん、このような名称はあくまでも便宜的なものであって、個々の作品を区別する基準にはならないが、詩の動向を示すものとしては意味がある。

六〇年代になると、公民権運動やベトナム戦争によってカウンターカルチャーの機運が高まり、七〇年代には、フェミニズム（女性解放運動）やエコロジー（地球の環境保護）の視点から詩が作られるようになる。これまでの人間（男性）中心主義の西欧文化とは違った、アメリカ先住民の世界観や禅に代表される東洋思想などを手がかりに、地球環境をとらえ直そうとする詩人が登場する。そしてロック・ミュージックでは、ボブ・ディランのような現代詩をうたうシンガー・ソングライターがアメリカ詩を活性化してゆく。この時代はディランの「時代は変わる」"The Times They Are A-Changin'" (1964) に象徴されるように、アメリカ社会もアメリカ詩も大きな変化を経験することになる。

八〇年代、九〇年代にかけては、二つの動きが見られる。一つは、詩人から読者という意味伝達のベクトルを覆すような詩人たちが登場する。「言語詩」(U=A=N=G=L=A=G=E Poetry) と呼ばれる前衛派の詩人たちである。この背景には、とりわけベトナム戦争時代における「偽りの言語」を問い直すというきわめて政治的な意図もある。もう一つは、「ニュー・フォーリズム」(New Formalism) である。このグループは、伝統的な韻律に縛られない自由詩が当たり前となった時代に、詩型の新たな可能性を求めている。

二〇世紀末から二一世紀にかけては、新たな傾向がみられる。それは「スポークン・ワード」(spoken word) と呼ばれる、コトバのリズムや抑揚を強調したポエトリー・リーディング (パフォーマンス) といえよう。ラップ (rap) もこのジャンルに入る。また、「ポエトリー・スラム」(poetry slam) という制限時間を決めて、ボクシングのように点数によって勝敗を競うイベントも盛んになってきた。

コンピュータとインターネットの普及によって、これまでの活字印刷（書籍）に代わるメディアが生まれ、詩の流通手段も変化してきた。現在の段階では、「サイバー・ポエトリー」（cyber-poetry）、「e-ポエトリー」（e-poetry）、「ニュー・メディア・ポエトリー」（new media poetry）などと呼ばれている。かつて活版印刷の普及によって詩の形体が「声の文化」から「活字の文化」へ変化したように、私たちの時代の詩も表現媒体によって大きく変わろうとしている。

この本で取り上げる詩人たちの多くは、ホイットマンの「子どもたち」である。

アメリカは、民主主義を実験しながら、『草の葉』出版から一〇〇年経った二〇世紀の半ばに、世界帝国になってしまった。政治、経済、軍事、産業、科学技術、人種および性差別、環境問題、多文化主義など、アメリカの抱える問題は、いま日本に暮らす私たちにとって、鏡に映った自画像である。アメリカの現代詩は、ジャーナリズムやマスメディアとは違った像を見せてくれる。それを文学史的、批評史的な立場からではなく、個々の詩作品をじっくり読むという当たり前の方法によって、さまざまなアメリカを届けたい。もし詩の持つ多層的な面白さをお伝えできれば、「アメリカ詩の郵便配達人」としてはうれしい限りである。

参考文献

Allen, Donald, ed. *The New American Poetry: 1945-1960*. University of California Press, 1999.

Dickinson, Emily. *The Poems of Emily Dickinson*. R. W. Franklin, ed., The Belknap Press of Harvard University Press, 1999.

Whitman, Walt. *Whitman: Poetry and Prose*. The Library of America, 1982.

ウォルト・ホイットマン著、酒本雅之訳『草の葉（上・中・下）』（岩波文庫、一九九八年）
エミリ・デイキンズ著、新倉俊一監訳、東雄一郎・小泉由美子・江田孝臣・朝比奈縁訳『完訳 エミリ・デイキン
ズン詩集（フランクリン版）』（金星堂、二〇一九年）

はじめに

SAMPLE

目次

はじめに……………(001)

アメリカ現代詩入門……………001

第一世代

エズラ・パウンド——モダニズムの仕掛け人……………039

ウィリアム・カローロス・ウィリアムズ——アメリカ土着のモダニズム……………069

ウォレス・ステイヴンズ——究極の虚構の詩人……………089

T・S・エリオット——都市をうたう現代詩人……………123

E・E・カミングズ——詩絵の世界……………161

H・D——イマジストからフェミニストへ……………	183
マリアン・ムーア——細密画の詩人……………	207
ロバート・フロスト——光と影の詩人……………	229

第二世代

チャールズ・オルソン——ポストモダンの長篇詩……………	253
アドリエンヌ・リッチ——時代を変えるフェミニスト詩人……………	283
ロバート・ロウエル——時代と個人の狂気……………	309
エリザベス・ビシヨップ——喪失から生まれるもの……………	327

第三世代

アレン・ギンズバーク——国家を糾弾する裸の詩人……………	347
------------------------------	-----

フランク・オハラ——都市生活のエレジー……………	379
ゲリー・スナイダー——野性のスポーツ・パーソン……………	397
ボブ・ディランとアメリカ詩——「激しい雨が降りそうだ」を読む……………	427
あとがき（感謝をこめて）……………	473
著者が選んだベスト・アメリカンポエトリ「一〇〇冊」……………	477
日本語で読めるアメリカ詩のアンソロジー……………	483
使用作品クレジット一覧……………	483